第三回 齋藤茂吉短歌文学賞

塚本邦雄『黄金律』 花曜社

正賞・茂吉自筆色紙の織画／副賞・賞金百万円

選考委員

委員長 岡野弘彦

委員 川村二郎

島田修二

宮地伸一

安永蕗子

（五十音順）

塚本邦雄『黄金律』（自選十首）

すみやかに月日めぐりて六月のうつそみ淡く山河濃きかな

今生にうたひつくして歌の名はわすれむ虚空に桐の花

とほき冠雪の山見えて晩年のいつくしき季に入りなむわれは

いくさ五十年あらざれば疾風に藤うちなびきいくさのごとし

絶唱にちかき一首を書きとめつ机上突然枯野のにほひ

桃山産婦人科メスの音さやぎ除外例ある生のはじめ

ははそはの母が掃いたる八畳に月光を入れわれは出てゆく

わが胸のあたりに翳す月山の絶巓に觸れきたりし白雲

くれなゐの冬扇腰におとしざしいざ今日はけふの修羅にまみえむ

秋冷のこころぞさわぐこの世よりあらざらむ世へ時の急流

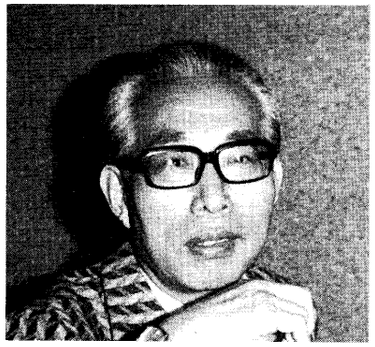
受賞の言葉

塚本邦雄

齋藤茂吉短歌文学賞の第一・二回選考委員を務めて、岡井隆・本林勝夫両氏を推挙し得たことを、一代の光栄と考えていたところ、その第三回を、私自身が戴くことは無上の誉れであり、本懐として肝に銘じている。

昭和三十年代、岡井隆氏と轡を並べて現代短歌の明日への道を切り拓いた頃から、胸中には常に『赤光』から『つきかげ』への茂吉的世界の輝きがあった。四五年本林氏の『斎藤茂吉集』（角川書店）によって開眼、驥尾に付して茂吉研究に没頭すること十年、秀歌五百首の鑑賞本を刊了した時、私の第二の歌人的人生は始まった。

最新刊の『不可解ゆゑにわれ愛す』は、それ以後の茂吉再発見試論を中心としている。これら茂吉心酔の論文のあまたも、併せて評価を受けたのならば、まさに本望であり、歌人として瞑すべきかと自祝する次第である。



齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

塚本邦雄（つかもと くにお）

歌人。近畿大学教授。大正11年8月滋賀県生まれ。昭和26年『水葬物語』で歌壇に登場。寺山修司・岡井隆らと共に、1960年代の前衛の旗手として、現代短歌を刷新推進。昭和34年『日本人霊歌』現代歌人協会賞。昭和62年『詩歌変』詩歌文学館賞。平成元年『不変律』迢空賞。平成2年秋の紫綬褒章受章。

序数歌集『黄金律』まで18冊。間奏歌集『ラテン吟遊』等5冊。『塚本邦雄湊合歌集』、自選歌集『寵歌』。『茂吉秀歌』5巻本（約3,000枚）昭和62年刊了（文藝春秋）。評論集『不可解ゆゑにわれ愛す』、小説集『連弾』他、単行本約200冊。

選考委員による 選評

『黄金律』を推す

岡野弘彦

齋藤茂吉という、短歌史の上に大きな位置をしめる歌人の名を負った賞の選考には、それだけの慎重さが要求せられる。

その受賞対象となるものは、今年度の歌壇の業績を代表するようなすぐれた一冊であるとともに、その作者のこれまでの業績が鬱然とした一つの体系を持っていることが望ましい。『黄金律』はそういう歌集であり、作者の業績はそれにかなうものであると思われる。

短歌という文学は不思議なところがあって、万葉集の時代はあれほど遣唐使や遣新羅使が派遣され、渡来人が集団でおとずれる、国際性豊かな時代であったにもかかわらず、短歌で海外の国を歌い、短歌で仏教をはじめとする外来の思想や宗教を歌い得た作品は、万葉集にほとんど一首もない。

平安時代以降は、日本化した仏教思想を歌った歌はあるが、長い鎖国時代に入って、外国を歌うことは無いままであった。大正の末になって齋藤茂吉がドイツに留学し、『遠遊』と『遍歴』二冊の歌集でヨーロッパを歌ったのは、まさに画期的なことであった。

塚本邦雄氏の戦後から『黄金律』に至る十八冊の歌集には、幾つかのテーマがあるが、その一つにヨーロッパのキリスト教の教義内容をテーマにした歌の流れがある。これは従来の短歌の風土に無かったものを、短歌でとらえようとしたという点で、茂吉の前記二歌集の業績にかようものがある。

歌の風姿の上では茂吉の歌と大きな相違を見せる塚本氏が、『茂吉秀歌』に見られるように、なみなみならぬ深い憧憬をこの大先輩に寄せる心中も察せられる思いがする。今年度の齋藤茂吉短歌文学賞に、塚本邦雄の歌集『黄金律』を推す理由である。

黄金の翳り

川村二郎

きらきらと輝きながら跳ね躍る言葉の戯れによって、読む者の眼をくらませるのが塚本邦雄の歌の本領で、それはこの新歌集『黄金律』でも、基本的に変っているとは思われない。ただ、時代に対する苛立ちや嘲りがストレートに表出されるかと思えば、はね返って自嘲のひびきを伝えてきたりする屈折した歌の趣をうかがうと、この年齢を知らぬような才気煥発の言葉の幻術師の作にも、老いの翳りがさしてきたかと思われ、一種の感慨に誘われる。

短歌復興の継承者

島田修二

歌集『黄金律』は塚本邦雄の十八冊目の歌集であり、質量ともにもっとも多力である著者の記念碑的刊行であることは、その題名からも察せられよう。

近代における短歌の復興に、万葉集の民族的活力を生かし、加えて独自の感受性をもって日常の市民感覚を詩に転生させた斎藤茂吉の思想を、ほとんど対極といってもいい距離を置きながら、猛然と摂取継承に挑んだのが塚本邦雄であった。流派としても方法としても、根岸短歌会系に遠く、みちのくから遠く隔たる関西から、したたかに茂吉の中に生きる日本を探る。その秀歌のすぐれた解説を続けたことはつとに知られているが、近年は実作においても茂吉を追求しており、『黄金律』には多く、茂吉秀歌を本歌とする秀作が認められる。

戦後、ひとたびは滅亡の淵をのぞんだように見えた短歌形式に、近代詩歌の伝統を総動員して再生をめざした著者は、日本的伝統の単純再生産を拒否し、その負数的性格を指摘されたこともあるが、負数の相乗によって正数が生れるように、この『黄金律』において現代短歌における達成を果たしている、と言ってよい。

わが胸のあたりに翳す月山（ぐわつさん）の絶巓に觸れきたりし白雲

『黄金律』の終りにちかく、ひっそりと置かれた、この暗示的な一首に、著者の茂吉恋い、みちのく恋いを読みとるのは私ひとりではないだろう。

光を添える

宮地伸一

斎藤茂吉と塚本邦雄。歌風の上では決定的に対立しているように見えるが、この両者を結ぶ接点は少くない。塚本氏が茂吉から大いに養分を摂取しているからである。その労作でライフワークとも言い得る『茂吉秀歌』五巻を読めば分かるように、現代の日本においてこの歌人ほどに茂吉に打ち込み、その本質を捉えて茂吉に迫る人が、ほかに何人もいるとは思えない。

そういう意味でも、今回の「齋藤茂吉短歌文学賞」の受賞は、この文学賞に光を添えるものと言うべく、喜びに堪えないのである。

何よりも、黄金律

安永蕗子

塚本邦雄氏は第一歌集「水葬物語」以来、たえず急速な進撃を果して来た。作品は常に常識の湿地を拒否し、洋の東西にわたる多大な芸術作品に挑戦し、その血肉を歌作の力とした。博学洽聞（こうぶん）は常に虚妄の独断を制し、精細な渉猟は現代の枠をこえて発想の新鮮を磨いた。たとえば氏の挑戦の一つ、「茂吉秀歌」五巻の大作は、相対する極から極への果敢な精神の照射であった。その鑑賞と茂吉への肉迫は、他者の引用や援用を許さぬ独創の文体でもあった。こうした壮絶な努力と才質の果ての歌集『黄金律』である。もっともふさわしい受賞作品だと思っている。

これまでの受賞者

第一回　岡井　隆『親和力』砂子屋書房

第二回　本林　勝夫『斎藤茂吉の研究――その生と表現――』桜楓社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局
〒九九〇　山形市松波二丁目八――一
山形県生活福祉部生活文化課内
☎〇二三六――三〇――二一五八